

# 福島県でのリスクコミュニケーションの重要性 Importance of risk communication in Fukushima prefecture

安井 清孝

Kiyotaka YASUI

福島県立医科大学 放射線健康管理学講座

Department of Radiation Health Management, Fukushima Medical University School of Medicine

私は本学術集会のシンポジウム III「共同大学院の学びからおりなす放射線看護学—災害被ばく医療科学共同専攻修了生の将来へのビジョン」に、福島県立医科大学の災害被ばく医療科学共同専攻修了生として参加させていただきました。そこで共に学んだ長崎大学の山口拓充さんと田中祐大さん、そして福島県立医科大学の一期下の小野寺悦子さんと共にシンポジストとして登壇させていただき、懐かしさと新鮮さの入り混じる気持ちで発表をさせていただきました。

私が共同専攻のテーマとして選んだのは、震災当時小学生だった子どもとその親の放射線不安に関するインタビュー調査でした。私がそのことを研究テーマとしたのは、震災後、小児の放射線不安の調査が行われていなかったことからです。小児が放射線についてどのような考えを持っていたかを明らかにするという事は、福島県で暮らす住民にとって、とても有意義な情報になると考えました。この研究ができたのは、災害被ばく医療科学共同専攻という学術的礎と、福島県という場所だからこそ成立し得たテーマだったと考えています。

今回のシンポジウムで、放射線看護という背景をもつ聴衆の皆さんに対して、研究の成果を発表させていただけたことは、私にとっても非常に貴重な経験となりました。ひとえに放射線といっても、放射線治療で用いる放射線と、原子力災害で環境中に放出された放射線では、その社会的意味合いが大きく異なります。

放射線のエネルギー量では、治療で用いられるエネルギーが圧倒的に高いにもかかわらず、災害によって環境中に放出された放射線のもたらす社会および個人への影響は、計り知れないものがありました。研究を通して原子力発電所事故後に福島市で暮らしていた親子のインタビューをしたことにより、私自身の理解もより深まりました。

幸い、シンポジウムの聴衆の皆さんは、日ごろから放射線に関わる方々だったこともあり、拙い発表内容にもかかわらず、発表後に数名の方からコメントをいただき、こちらの意図とすることを汲んでもらうことができたように感じました。

福島県では、原発周辺の自治体を除き、住民の暮らしはほとんど平常に戻っていますが、今後も事故収束作業が続くため、リスクコミュニケーションの重要性は継続しています。今回シンポジウムに参加したことにより、災害被ばく医療共同専攻修了生として、今後も福島県でのリスクコミュニケーションに、長く関わっていききたいとの気持ちを新たにすることができました。